

中部の

エネルギーを 築いた

人々

愛知電気鉄道を創設し沿線地域への
電気供給を進めた **岩田作兵衛**

甲武鉄道の創設・経営

岐阜県笠松町出身の岩田作兵衛は、東京での鉄道経営に成功し、名古屋電力取締役や愛知電気鉄道社長として地元の事業にも尽力した事業家である。

岩田は、天保13(1842)年12月、機業家岩田新七の長子として生まれた。家業に失敗し15、16歳のころ横浜に出て、大倉組に入り、後年実業界で名をはせる兩宮敬次郎、田中平七等と知り合った。明治16年5月、新宿・八王子間を結ぶ甲武馬車鉄道を計画し、自ら測量を行い、初代愛知県令を務めた井関盛良を発起人総代に依頼して申請。同21年3月蒸汽鉄道へと変更して免許を得、22年4月に開業した。今日のJR中央線の先駆けである。その後、明治37年に電化するとともに、神田三崎町まで延長した。

岩田は甲武鉄道(社長:三浦泰輔)のほか、川越鉄道(西武鉄道前身)、京浜電気鉄道(京浜急行電鉄前身)、武相中央鉄道(小田急電鉄先駆け)など多くの鉄道事業の創設・経営に関わったほか、電力業でも、山梨県桂川水系で水力開発を行った桂川電力の専務取締役として手腕を発揮した。しかし、明治39年鉄道国有化法により、甲武鉄道は国有化され買収資金を手にしていった。



岩田作兵衛

名古屋電力に参画

岐阜県八百津町に発電所を設け、名古屋地域の工場へ電力供給を目指す名古屋電力は、

岩田と同郷で衆議院議員であった兼松照が中心になって設立した会社である。甲武鉄道の



名古屋電力 八百津発電所(当時)



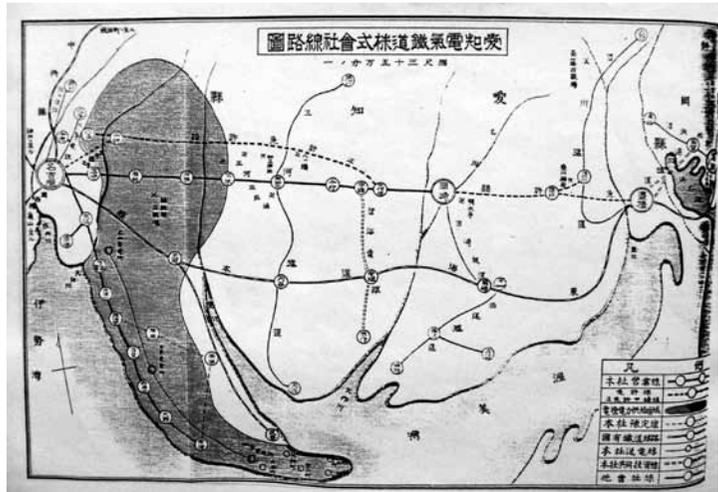
八百津発電資料館(旧八百津発電所)

国有化で資金と時間に余裕を得た岩田は、兼松の求めに応じて発起人に加わり、明治39年10月の発足後は取締役役に就任した。名古屋電力(社長奥田正香、資本金500万円)は、東京資本と名古屋資本とが折半して設立されたが、東京の出資者に三浦泰輔、桂二郎(監

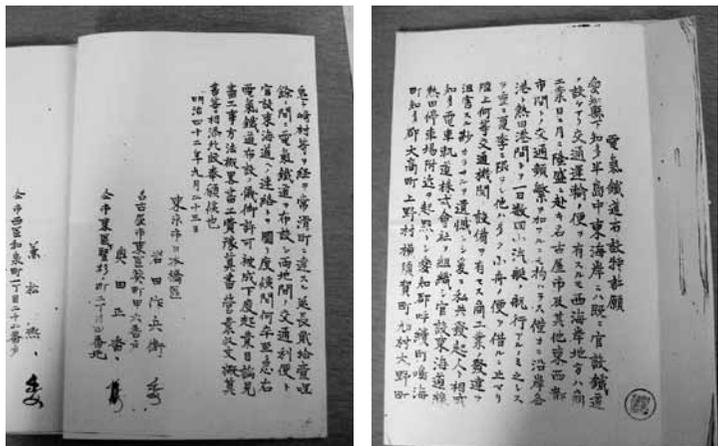
査役に就任)、雨宮敬二郎(相談役に就任)など甲武鉄道関係者が多いのは岩田の協力によるものであろう。しかし、名古屋電力は八百津発電所の水路工事が難航し、また経済不況のなか資金調達が困難になったため、明治43年10月、名古屋電灯と合併した。

愛知電気鉄道社長

明治39年頃、熱田新宮坂・常滑間を結ぶ知多電気軌道(後に愛知電気鉄道に改称)が兼松熙等によって計画されたが、許可がなかなか得られず、鉄道経営の専門家として岩田に協力が求められた。岩田は発起人総代となり、明治43年11月、会社発足後は社長に就任する。鉄道経営の経験(甲武鉄道の電化、京浜電気鉄道の電気供給業兼営)を生かし、蒸気鉄道から電気鉄道への変更、沿線地域での電気事業の経営を推進した。愛知郡鳴海町や知多郡有松町・大野町・常滑町など沿線地域に電気を灯したのは愛知電気鉄道であった。同社は発電所を持たず、名古屋電灯から受電し、名和、日長に電鉄・電力供給用の変電所を設け、明治45年2月に開業した。電気事業は、発足後経営が不安定な時期に電鉄事業に匹敵する収入をあげて経営を支えた。大正3年8月、社長を引退

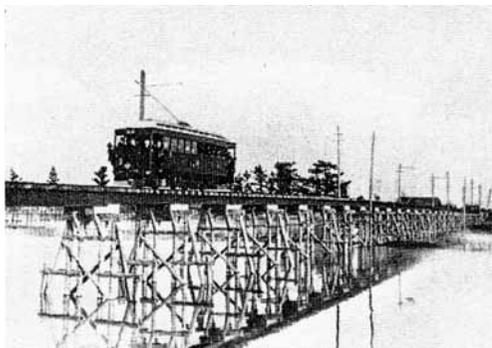


愛知電気鉄道供給区域図・線路図



電気鉄道布設特許願(知多電気軌道株式会社)

し、後任社長は名古屋電灯の経営者福沢桃介に委ねた。



愛知電気鉄道(天白川橋梁と電車)



名和変電所(当時)

岐阜県笠松町と埼玉県川越町に記念碑

岩田は大正12年9月、成功した事業家として、82歳で没した。岩田の記念碑が2つ残っている。1つは郷里笠松の菩提寺河野称名寺の境内に「岩田作兵衛之墓」と彼が寄進した経蔵が残っている。また埼玉県川越市にある名

刹喜多院境内には「岩田作兵衛翁記功碑」(大正10年12月建立)があり、晩年まで専務取締役を務めた川越鉄道での彼の事績や鉄道事業への貢献が記されている。(浅野 伸一)



岩田作兵衛之墓 河野称名寺(岐阜県)



岩田作兵衛記功碑 喜多院(埼玉県川越市)



岩田作兵衛寄進の経蔵 河野称名寺(岐阜県)



岩田作兵衛記功碑 喜多院(埼玉県川越市)